

ある日のこと、マーサおばさんが、手に分厚く切った一切れのハムを持って庭に立った。

「クロフカ……クロフカ……」

いつものように庭のはずれから、クロフカと呼ばれるようになった若犬が黒い姿を現した。

茂みから半分くらい体を出して、少し首をかしげるようにしてこちらを見ている。

マーサおばさんは、芝生にしゃがんで目線を低くして犬に呼びかけた。

「出ておいで……ほら、ごちそうがあるよ……」

そして、じっとその場で犬の様子を見守った。

犬は犬で、誰でもない最も信頼を寄せている人の呼びかけに、尻尾を少し立てて、かすかにユサユサとゆらした。そして、一歩また一歩と、少しずつ近づいてきた。

庭の真ん中で、かなり離れて向かい合う犬と人間……

まだこの時点では、飼い犬と飼い主というには少し遠い感があった。

マーサおばさんは、犬によく見えるようにハムを持った手を思いつきり伸ばして

「ほら、おいで。……来てごらん、おいしいよ……。お前の大好きなハムだよ……いつもは刻んでご飯に混ぜてるけど、今日はまるごと一枚、しかも厚めに切ってきたよ……」

と、静かに呼びかけた。

犬はまた少しずつ近づいてきた。

そして、とうとうマーサおばさんの目の前にやってきた。

手を伸ばせば、犬の頭に届くほどの近さである。

マーサおばさんはやさしく微笑んだままじっとして動かない。

「おばさん……あの、来ましたけど……。あのお、これ以上はちょっと……」

「クロフカ、よく来たね……はい、あげよう。おあがり……」

「おばさん、そのハム……落としてくれませんか……」

犬は、人が手からハムを離して落とすのを待った。尻尾が再びユサユサと揺れた。

がしかし、マーサおばさんはハムを離さない。そして、伸ばした腕をそのままに手に持ったハムを犬の鼻先にかざした。

「はい、おあがり」

すると、ごく自然に犬は目の前のハムをパクリとくわえた。

一瞬、くわえたまま噛まずにその場にたちつくしている犬に向かって、

彼女は静かに話しかけた。

「食べていいんだよ。おあがり……。ゆっくりと、おあがり……」

犬はくわえたハムを、一旦自分の足もとに落とすと、一度、人間を見上げた。

彼女が微笑みながら頷くのを見て、犬はあらためて食べ始めた。

マーサおばさんは、芝生にしゃがんだまま、犬の食べる様子をながめている。

「うまあ……うまいです……おばさん」

犬は、しみじみハムを味わった。

「ほーら、おいしいでしょ……お前が人の手から直接ものを食べたのは、初めてだね……」

そして、食べ終わると、その場にじっとしてマーサおばさんと顔を見合わせた。

「クロフカ……お前が、そばに来てくれて嬉しいよ」

ふたりともその場を動かず、顔を見合せたまま、ゆっくりと時間が流れた。

じっと人間を見つめる狼顔の黒い犬は、目のあたりが白くて鼻先がとんがり、慣れていない犬というだけで、少し怖い印象がある。

しかし、マーサおばさんは、変わることなく微笑んで静かに呼びかけた。

「いい仔だね……お前の名前はクロフカだよ……いい仔だ」

やがて彼女は、犬を驚かさないように、静かにゆっくりと片方の手をかざすと、その手をふっと犬の頭の上に置いた。

犬は一瞬びくつとしたが、そのまま動かなかった。

マーサおばさんは、犬の頭から手を離すことなく、優しくその黒い毛でおおわれた犬の頭を撫で始めた。

そしてゆっくりゆっくり撫で続けた。

「いい仔だね……クロフカ……いい仔だね……お前の名前はクロフカだよ……お前ははとも優しいんだね……賢いね……よくうちにきてくれたね」

マーサおばさんの手の優しい感触が、犬の体全体に広がっていった。

彼女は犬の頭を撫で続けながら語りかけた。

「お前がうちに来てくれて嬉しいよ……ありがとうね……」

若犬の中で、固くなっていた何かがゆるやかにほぐれて溶けてゆくのを感じた。忘れていた何かを思い出した。

こうして若犬は本当に「クロフカ」となり、クロフカは名実ともに、この家の家族となった。

やがて、子犬の頃に着けられてそのままだった、小さくてきつい首輪は、新しいのに替えられ、鑑札のプレートが付けられた。

つづく